

—先輩のことば—

今回は皆さんの先輩にあたる第1期生と第19期生「堀井 素史」さんと「飯田 智史」さんの思い出を「創立20周年記念誌」から載せました。

「一中略—開校当時は、現在職員室のある建物と、プレハブ校舎で、その他の校舎は建設中だったと思います。雨が降るとぬかるみ、石ころだらけの運動場をかけまわりボールを田圃の中まで追いかけたり、雨がトタン屋根の校舎にあたり、授業をさまたげたりすることもたびたびありました。一中略—クラブ活動でも、先生方をはじめ、生徒が一丸となって、大庄北中学校の伝統や校風を私たちが作っていくんだという気迫に燃えていました。テニス部が、阪神大会で個人、総合共に入賞し、全校の志気の高揚に拍車をかけたことや、初めて開かれた運動会で、日頃の練習の甲斐あって、その演技に拍手喝采をあげた事など走馬燈のように思い出はつきることもなく、私の脳裏をかすめます。自分たちは、苦しさの中にも、大庄北中学校の第一回卒業生となる事に誇りを持っていました。—中略—

私は、勤務の関係で海外出張が多く、外国人との交わりも多くありますが、常に「日本程世界—”物”の豊かな国はない」ということを思います。私たちが中学校生活を送った20年前の環境と、今の皆さんのおかれている社会は、考えられない程変わっていると思います。最近マスコミを賑わしている事を耳にする度、年月の違いはあろうとも「中学校3年間は、人生の試練として最初の岐路にたつ年である」ということを深く自覚され、将来に大きく羽ばたく基礎造りであることを切実に考えられ、明日に向かって邁進され、社会に貢献される、有意義な生活を送られる事を希望します。

1期生 堀井 素史さん

「時のたつのははやいもので、僕が北中を卒業してから一年半になります。生徒会活動の一環として、委員会を開きましたが、なかなかうまく進みませんでした。話し合いの基盤ができていなくて、意見の不足がありました。しかし、議論はへたでも生徒一人ひとりが物事を真剣に考えることによって、しだいに創造的な意見が出てくるだろうと思いました。

美化キャンペーンと題して、融資を集めて早朝掃除をしました。だいたい百人ぐらいの生徒が集まったと思います。残りの八百人にも来てほしかったのですが、仕方ありません。学校をきれいにする事は善いことだと思いますが、それ以上に、生徒自身が、そういう活動を通じて、美化の精神をもつこと、育てることが大切であると思います。—中略—その他いろいろありましたが、僕が生徒会長になって率直に感じたことは、人を動かすのはむずかしということでした。皆が皆やる気を出すわけではないし、皆が皆努力、協力をするわけではありません。集団が一つの物事を成すには、まとまらねばならないし、そのために一部の人の意見を犠牲にしなければならない時もあります。—中略—生徒は、生徒会活動が自分たちの活動であり、自分たちが創っていく自治活動だと認識し、大いに利用していいと思います。そこから様々な相違・工夫が生まれ、努力・協力が生まれ、物事をよく感じて、真剣に考える態度が生まれると思います。—後略—

19期生 飯田 智史さん